

「アーティスト・イン・レジデンス事業の評価」

◇パネリスト

小吹隆文（フリーライター）

菅野幸子（国際交流基金コミュニケーションセンター プログラム・コーディネーター）

モデレーター 杉山道夫（陶芸の森創作研修課長）

杉山●最後のセッションは、今回のシンポジウムのサブテーマ「レジデンスを評価する」という辛辣な、ある意味行政的なタイトルです。

パネルをお願いします最初の小吹隆文さんは、情報誌『ぴあ』などの美術欄を担当され、現在はフリーランスとして主として美術関係の記事を関西の新聞、美術系の雑誌等にご執筆されています。

もうお一人は菅野幸子さん。宮城教育大学、ブリティッシュ・カウンシル東京をへて、現在は国際交流基金コミュニケーションセンター プログラム・コーディネーターです。それでは、小吹さんからお願いいたします。

アーティストの生の声に耳を傾けてください

小吹隆文（フリーライター）

私は、ライターとしてマスメディアの仕事をしており、研究者ではございません。ただ私は仕事柄、たくさんの美術家とのつきあいがあるので、きょうは彼らの声を集めてこの場で代弁する、そういう発表をすることにします。メールを使ってアンケートをとるかたちで声を集めました。仕事をしながらですから、あまり多くの声は集められなかったのですが、アーティストの生の声を聞くことができましたので、これを加工せずにそのままぶつけようと思っております。

11項目あって、前半はデータの内容を図式化していますので、ここは端折ります。

最初は「男女比」です。男性が約3分の2を占めています。〈資料1〉

二番目は「年代」です。20代と30代がほぼ4分の3を占めています。〈資料2〉

三番目は「居住地」について。これには関西に住んで活動している私の属性がしっかり出ていて、関西の方が4分の3を占めています。〈資料3〉

四番目は「制作ジャンル」。いちばん多いのが絵画、2位がインスタレーション、3位が彫刻と陶芸。インスタレーションはすこし漠然として、詳細は把握できていません。〈資料4〉

五番目はすこし具体的になっていて、「AIRへの興味はあるのか」という質問です。〈資料5〉85パーセントの方が「興味はある」と答えましたが、経験したことのある方は39パーセントに留まっています。興味はあるが経験者は少ないという傾向がわかりました。

六番目は、AIRの情報をどこから得ているかです。〈資料6〉トップはインターネットですが、2位の口コミ、3位の友人の紹介、4位の推薦を合わせるとインターネットより多くなります。現状では、個人的なネットワークに頼って情報を得ているのです。この結果から、AIRを主催する側の情報の出し方に改善の余地があることがみえてきます。

じつは、さきほどの質問で「どのサイトを利用したか」を具体的に記載した人は2人だけでしたが、ご紹介しておきます。〈資料7〉一つはトランスアーティストという海外の情報共有サイト。もう一つが、京都の東山アーティスト・プレイスメント・サービス (HAPS) です。

ここからしだいに具体的な話になります。「どうして AIR に参加するのか、したいのか」。その回答を項目ごとに分けました。多かったのが「優れた制作環境を得たい」。〈資料8〉「大きな作品をつくりたい」、「自分のアトリエで作れないものを作りたい」、「別の場所に行って、その場所でしか作りえないものを作りたい」でした。

同じ質問での回答のもう一つの傾向として、「普段とは異なる環境で自分を見つめ直す」、「アウェーな環境に身を置いて、これまで気づかなかった自分を見つける」、「自分のさらなる伸びしろをつくる」などの意見がありました。〈資料9〉

「出会い」という意見もありました。〈資料10〉「日常生活では得られない新しい人間関係をもちたい」ということです。

この質問に、「キャリアの構築」という項目がありました。〈資料11〉私としては意外な回答だったのですが、AIR を経験することで、たとえば「海外で活動するためのステップにしたい」とか「自分の実績を積みたい」という声が、多くはないものがありました。現状の AIR がこういうキャリア構築のツールたりうるのかを主催者側も考えるべき段階だと思います。

九番目に、AIR に参加したことのある人に、「評価できる AIR を教えてください」と質問しました。すると、滋賀県立陶芸の森を答える人が多かった。〈資料12〉理由は、「スタッフが充実している」、「設備が充実している」、「自分一人ではできないこともスタッフから教えてもらって学ぶことができる」、「海外の人とも出会える」など、かなり高評価でした。

ここからはすこし端折りながら進めます。デンマークの Project Network の陶芸 〈資料13〉、そして横浜の BankART AIR 〈資料14〉。Force of Nature 〈資料15〉は、アメリカの単発のイベントだったようです。Nairobi Residence 〈資料16〉は、美術家の西尾美也さんの個人的なプロジェクトで、いまは休止していますがかなり継続してされていました。

境谷小学校レジデンス 〈資料17〉は、京都市立芸術大学が地域と連携している企画で、小学校の現役の教室を使って、さまざまな活動をしています。

COLLECTING TIME KYOTO GENEVE 〈資料18〉は、京都の同時代ギャラリーとジュネーブのアートスペースとが取り決めを結んで都市作家を交換しあっています。

十番目の質問は、「AIR の条件面、環境面で望むこと」はなにかです。〈資料19〉「制作・生活環境の充実」などは理解できますが、私が過去にかかわった AIR ですこし問題があると思ったのは、宿泊場所を提供できない AIR があることです。やはり宿泊施設をきちんと提供することは重要ではないでしょうか。

次が「金銭面のサポート」。〈資料20〉この回答がかなりありました。やはり、さほど成功していない方、金銭的にかなり厳しい方がいらっしゃる。アルバイトや仕事を休んだり、辞めたりしないといけなければ、AIR には行けない。そういう「費用のサポートをしてもらえると助かる」という意見が多々ありました。

金銭面のサポートに関連して、四つ目の回答がおもしろかったのですが、日本と海外では年度の始まりが4月と9月とちがうことで、「助成の申請に支障が出る」ことです。私

も「なるほどな」と思いました。

「スタッフについて」は、制作や生活のサポートをしてくれるスタッフがいることが望ましいという意見が、思っていたよりも多くありました。〈資料 21〉

次は、おもに仕事をもっておられる方からの意見だと思いますが、「2 週間程度など、短期間の AIR があっても良いのではないか」。〈資料 22〉次の項目では逆に長期を望む方もいますが、「年齢制限をしないでほしい」、「審査基準、なんのために AIR をするのかなどをもっと透明化してほしい」という意見がありました。〈資料 23〉

最後の質問は、「日本で AIR を普及させるには、どのような施策が必要か」。〈資料 24〉まずは、広報活動の充実とインターネットの検索性のアップです。〈資料 25〉チラシや印刷物でもインターネットでもよいのですが、「情報をもっとかんたんに得られるようにしてほしい」ということです。インターネットについては、「検索してもなかなかヒットしない」という意見がありました。

〈資料 25〉の下から二番目に、「SEO 対応から始めてほしい」と書いてあります。SEO は、検索をかけたときに上位あげるためのテクニックのことです。企業では、あたりまえのようにやっています。美術館や主催者への批判ではありませんが、こういうことにももうすこし心を砕くことがあってもよいように思います。

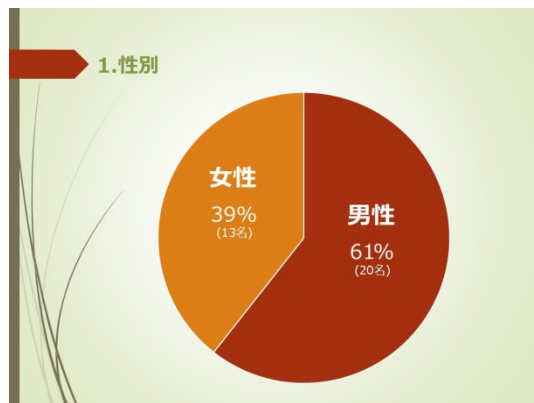
〈資料 26〉ではその他の項目に意見を四つ掲載していますが、私が注目しているのは「美術家のキャリアとなり、チャンスを得る機会になること」、「記録を形にして残してほしい」という意見です。記録は、私も重要だと思っています。豪華な冊子をつくる必要はなく、ということが行なわれたかがわかる記録を、できればそれをバイリンガルでかたちにする。そういう積み重ねが宣伝にもなります。国内国外問わず AIR の存在を知らしめたり、価値を高めたりすることにつながるのではないかと考えます。

その他がつづきます。「常勤の教職を数カ月休むことができ、小さな子供も連れて一緒に連れて行き、滞在先で保育園に預けられれば、ぜひ行きたい」、そういう「できたらいいね」という意見もあります。〈資料 27〉

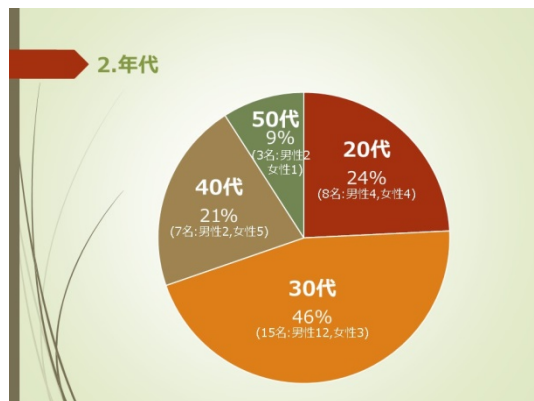
「AIR に滞在する作家は、昔の貸し画廊を借りていた作家の代替のような気がしてならない。お金がかからないし、手弁当でも来てくれるという価値観がなくなれば良くなる」という答え。主催者だけでなく作家さんにもきちんと目的意識をもって参加する人もいれば、自己満足的な気分で参加している人もおられるのでしょうか。この回答をされた人は、そういう作家さんの姿勢をすこし批判的にみえています。

最後に、「数を増やすよりも国際的に評価される AIR を作る、育てる」という回答がありました。〈資料 28〉意見はさまざまだと思うのですが、このような回答を見て、主催する側もアーティストも、なぜ参加するのか、どういうことを目的としているのか、そういう面を明確に意識して活動することが重要ではないかと思いました。報告は以上です。

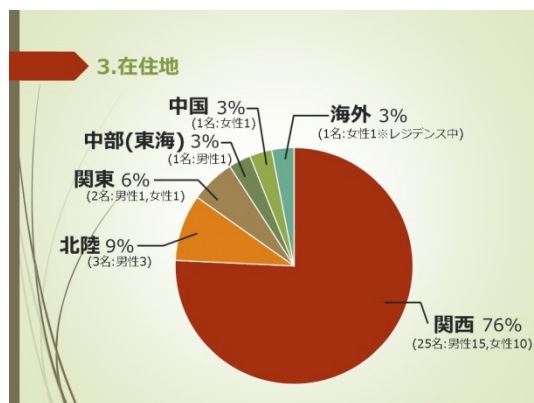
杉山●作家さんの意見をまとめた資料をみるのは今回がはじめてのような気がします。貴重な資料をつくっていただき、ありがとうございました。（了）



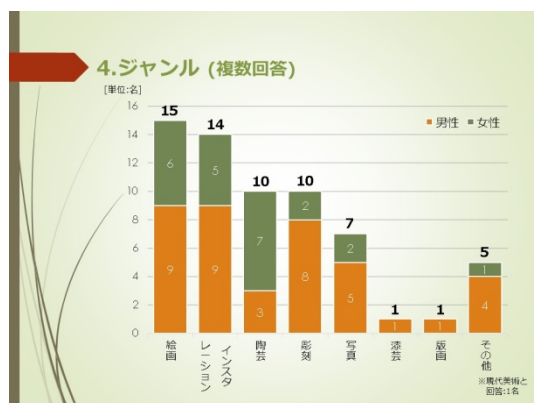
〈資料 1〉



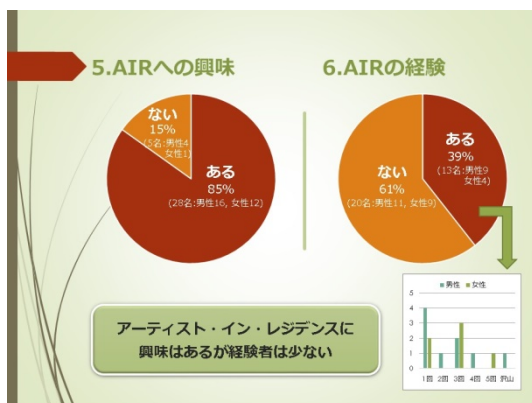
〈資料 2〉



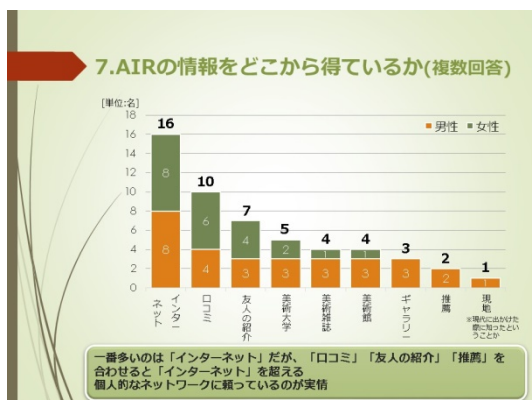
〈資料 3〉



〈資料 4〉



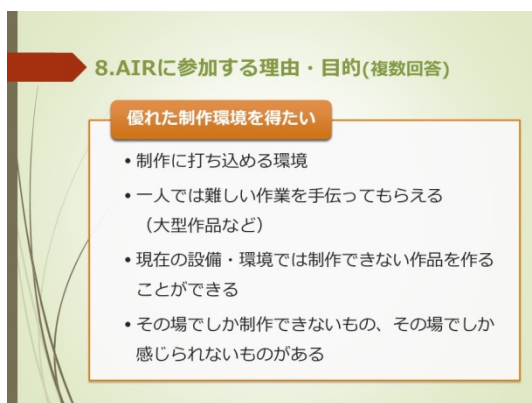
〈資料 5〉



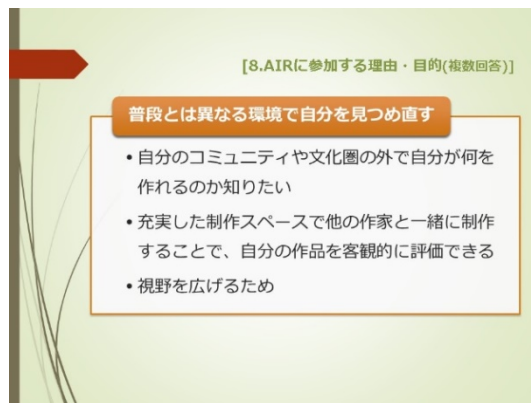
〈資料 6〉



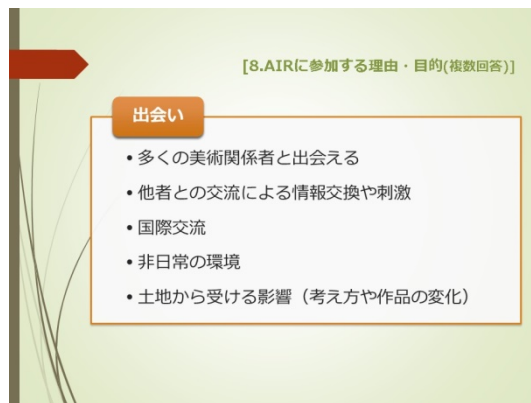
〈資料 7〉



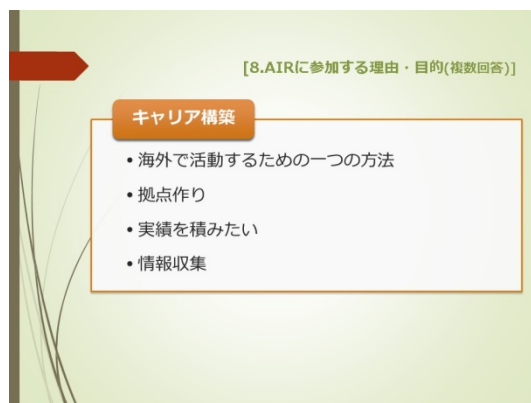
〈資料 8〉



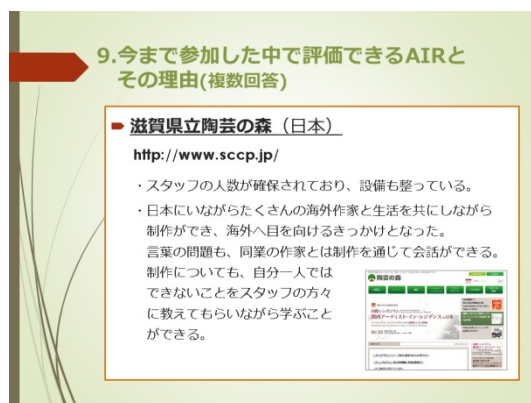
〈資料 9〉



〈資料 10〉



〈資料 11〉



〈資料 12〉

[9.今まで参加した中で評価できるAIRとその理由(複数回答)]

■ **Project Network (デンマーク)**

<http://ceramic.dk/project-network/>

6週間の間に制作と施設内のギャラリーで展示を行う
プログラム
はじめからスケジュールや展覧会が決められているの
で、不慣れな人でも
やりやすい。



〈資料 13〉

[9.今まで参加した中で評価できるAIRとその理由(複数回答)]

■ **BankART AIR (日本)**

<http://www.bankart1929.com/>

短期間の貸しアトリエのようなレジデンス
普段関わり合いのない作家とのつながりが出来て良かつ
た。



〈資料 14〉

[9.今まで参加した中で評価できるAIRとその理由(複数回答)]

■ **Force of Nature**

(米国、ノースカロライナ州立大学シャーロット校)

アメリカ人キュレーター2人による単発の自主企画
現地の大学やアートセンターと連携しており、受け入れ
態勢が整っていた。
必要な資金と時間をかけて準備しており、こちらの要望
を受けて現地の専門家を紹介してくれるなど、受け入れ
態勢が完ぺきだった。

〈資料 15〉

[9.今まで参加した中で評価できるAIRとその理由(複数回答)]

■ **Nairobi Residence (ケニア)**

<http://www.nairobi-artproject.jp/index.html>

日本人作家による自主企画
数回行われているが、現在は休止中
現地の市民がサポーターとして協力してくれ、普通の旅
行ではないスラムなど
でも活動ができた。



〈資料 16〉

[9. 今まで参加した中で評価できるAIRとその理由(複数回答)]

■ 境谷小学校レジデンス (日本)
http://www.kcua.ac.jp/event/20160224_sakaidani/
 京都市立芸術大学の地域連携企画
 現役の小学校の空き教室を1室使って製作ができる。
 小学生の訪問もあり、新たな刺激や発見を得られた。



〈資料 17〉

[9. 今まで参加した中で評価できるAIRとその理由(複数回答)]

■ COLLECTING TIME KYOTO GENEVE (スイス)
http://www.ch.emb-japan.go.jp/anniversary2014/event/tdes/926_collecting_time.html
 ・京都の同時代ギャラリーとジュネーブのThe Espace cheminee nord
 の交換プログラム
 作家の要望をできるだけ受け入れてくれる雰囲気があった。
 ・ジュネーブには日本人の在住者も多く、日本語が通じるフランス人も
 いて、予定が合えば通訳をしてくれた。
 ・ジュネーブには、美術館、大学、ギャラリーもある。
 レジデンス中に、市内のギャラリーが一斉に展覧会を行うアートウィーク
 が行われた。
 自分たちで若手キュレーターを
 探すことができ、展覧会を開催し、
 批評文も書いてもらえた。



〈資料 18〉

10. AIRの条件面、環境面で望むこと(複数回答)

制作・生活環境の充実

- ・作品制作に集中できる環境
 (作業スペース、設備の充実)
- ・生活面の利便性
- ・宿泊施設の充実
 (ホームステイやシェアハウスでも構わない)

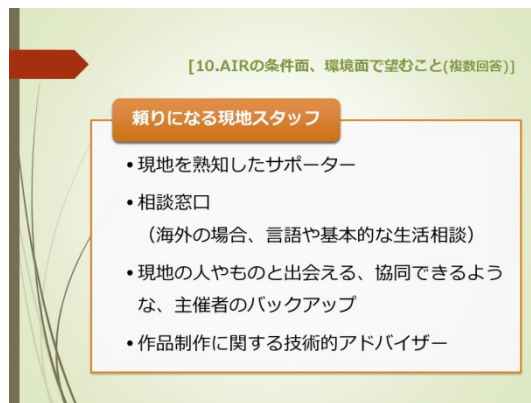
〈資料 19〉

[10. AIRの条件面、環境面で望むこと(複数回答)]

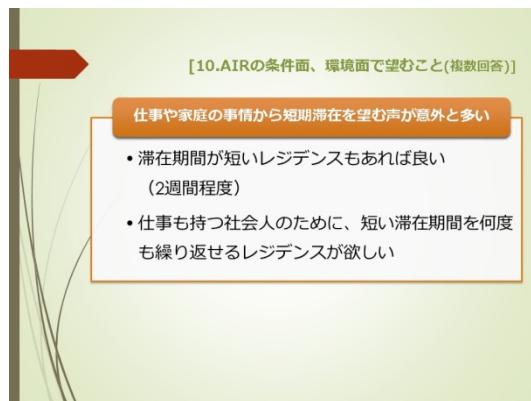
金銭面のサポート

- ・金銭的な支援、助成・奨励金制度による負担軽減
 (滞在費、渡航費、制作費、カタログ制作費)
- ・できれば主催者に全費用をサポートしてほしい
- ・レジデンスすることで収入が見込めること
- ・レジデンスと助成を別々に探るのが大変
 海外と日本の年度始まりの違い(海外は9月、日
 本は4月)による申請の難しさを解消してほしい

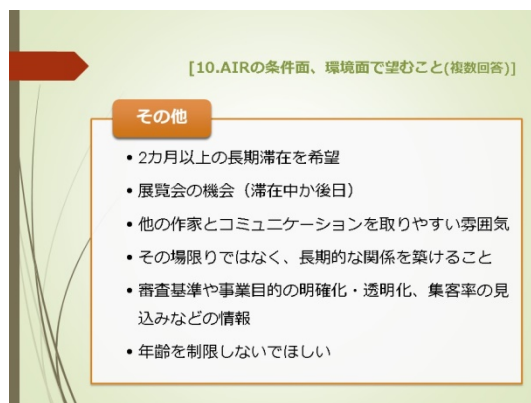
〈資料 20〉



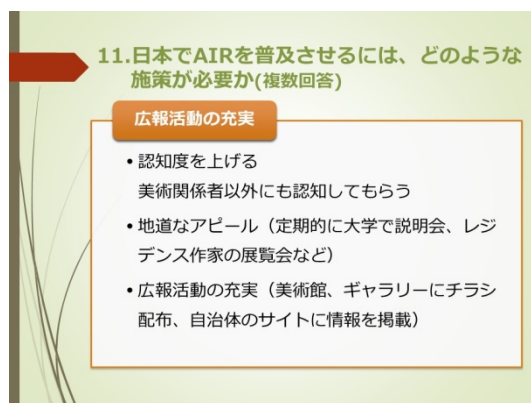
〈資料 21〉



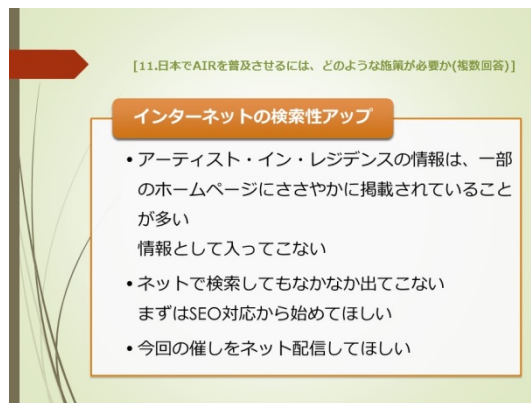
〈資料 22〉



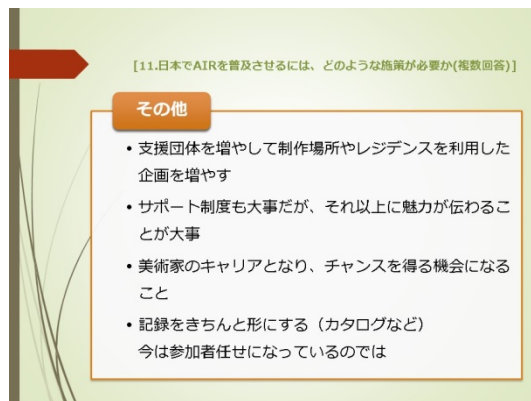
〈資料 23〉



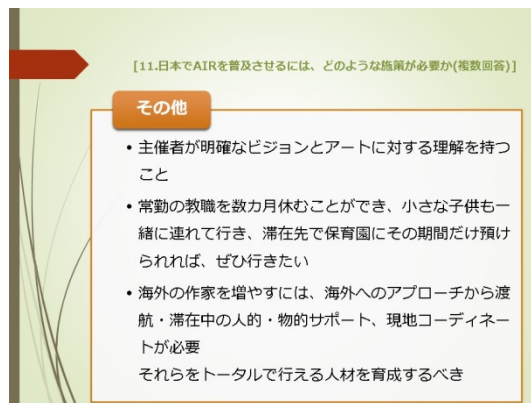
〈資料 24〉



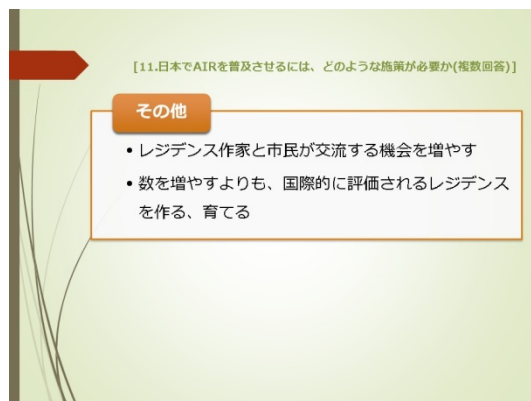
〈資料 25〉



〈資料 26〉



〈資料 27〉



〈資料 28〉